

オピニオン

リヒテルと広島



経営コンサルタント 岡村 有人

47年広島市南区生まれ。広島大学大学院修了。日立製作所中央研究所などで映像・音響分野の技術開発に従事。音響機器メーカー・ボーズの副社長を経て独立。被爆二世としての著書に「七つの川は銀河に届け」（日英両語）がある。東京都世田谷区在住。

ここでは広島・長崎への原爆投下から70年の節目の年である。戦後間もなく広島に生を受けた私は、東京に住まいして40年になる今でも、父母たちと過ごした復興の日々を折に触れて思い出す。

とりわけ広島を訪れた海外の音楽の巨匠たちのこと、彼らと聴衆が心通わせたことは、若き日の私の心に深く刻まれた。後に音響関係の仕事に就く私の原体験である。

中でも東西冷戦期の1960年、「鉄のカーテン」の向こうから西側に現れた伝説のピアニスト、スピヤトスラフ・リヒテルのことを終生忘れたいことはない。彼の西側デビューの2年後、米ソの緊張が核戦争寸前まで高まるキューバ危機が勃発する。どのような時代だったのか、そう言えばお分かりだろう。

くしくも、被爆70年は彼の生誕100年と重なる。

私も聴衆の一人だったリヒテルの広島公演は1974年5月のことだ。会場は完成間もない広島郵便貯金ホール（現在のの上野学園ホール）。

苦難越え 共鳴した「旋律」

プログラムは、ベートーベンの最後の三つのピアノソナタ第30番、31番、32番だった。リヒテルはこのホールの隅々まで温かく包むような、神々しい音で満たした。最後のソナタ32番の最終楽章は、ゆっくりと始まり、変奏を経て祈りの大河となって流れた。

それはやがてテレモロを伴って限らない高みへと導かれて、永遠の響きを惜しむように余韻を残しつつ終わる。もはやピアノの存在を忘れさせ、崇高な何かが天空から降ってきたように感じられた。郵便貯金ホールは静かな感動のオーラに包まれた。

聴覚を失いつつあったペートーベンが、保養地ハイリゲンシュタットで遺書を書いたのは32歳になろうとする頃だった。自死を思いとどまって56歳で世界するまで、閉ざされた彼の内なる世界では、音楽が鳴り響いていたのだ。晩年は生活苦や病苦と闘い、溺愛したおいカルルの養育問題に悩む。崇高な音楽が

鳴り響く内面的世界とは裏腹であった。だが、逆境にあっても妥協を許さない厳しさでスケッチを重ねたのが、ピアノソナタをはじめとする最晩年の作品群であった。逆境こそ彼の音楽の源泉であった。リヒテルもまた、さまざまに制約の中で演奏家人生を貫いた。彼は自由な芸術活動に對する旧ソ連の厳しい監視下で、長く活動を続けた。ドイツ系ポーランド人で、オデッサ音楽院のピアノ教授だった父親は当局にスパイ容疑で殺害された。母親とは後年、西側での演奏会で再会するまで20年間音信不通だった。

そんな家族について生前多くを語らなかつた。逆境にあつたりリヒテルがいちちの望みをつないだのは、先人たちの音楽であつたに違いない。ベートーベンは晩年の大作ミサ・ソレムニスのスケッチ帳の中で平和に対する祈りと何度も記す。第9交響曲合唱「でも一貫して感じられるのは、劇作家シラーの詩に託した人類愛と平和の祈りである。二つの大作の申し子とされる晩年のピアノソナタは、音楽の伝道師たるリヒテルを通して、原爆の災禍を乗り越えた広島の人々の琴線に触れる、祈りのメッセージであつたに違いない。

リヒテルが没して、はや17年になる。彼がもたらした祈りを回想する時、あの演奏は確かに広島にふさわしいものであつた。いずれも20世紀の苦難を体験した演奏家と聴衆が国境や民族や宗教の違いを超え、音楽という共通語を通して永遠なるものへ憧れを共有した一夜だったのだ。だが現実に戻って現在に目を向ければ、今なお米国とロシアの核兵器のうちの千発近くが、大統領命令を受ければ即座に発射できるという。潜在的核保有国に行く末も危うい。被爆国日本は核廃絶にかなる役割を果たしているのだろうか。

私は仕事柄、海外の人たちと話す機会が多いが、「ヒロシマ」が世界の人人々に与える響きは、日本で私たちが感じているよりはるかに大きいものがある。被爆70年の節目に、このことを再認識し、音楽を含む、あらゆる手段で広島から非核のメッセージを伝えていくのではないかと。

